

2013リトルリーグ インターミディエット部門

ワールドシリーズに参加して

インターミディエット日本代表監督 北谷 敏寿

“やりました。世界一です。”

アメリカの世界大会においては、強豪国ばかりで、勝ち上がれるかどうか不安でした。まず、最初の国際ブロックでは、カナダ、プエルトリコ、ラテンアメリカ代表（エクアドル）と、各国の野球のレベルは高い国ばかりでした。

そんな中、選手たちは、持ち前の明るさで、環境の違いなど関係なく、あれよあれよという間にファイナルまで勝ち上りました。

負けずに勝ち上ると、投手ローテーションにおいて有利であり、アメリカグループは参加州が多い分、試合数が多く、投手ローテーションが厳しかったと思います。

しかし、ファイナルで対戦すると、長身と長いリーチから繰り出される速球、スライダー、しかも荒れ球… 中盤までは苦しみました。

国際試合においては、こういうタイプの投手が多く、アジアパシフィック（予選）大会から数多く対戦してきていますので、ベンチからの指示は、ボール球に手を出さず、ファーストストライクを狙わない、球数を投げさせ、後半勝負に持ち込む。そのためには、しっかり守って、我慢する。以上を徹底させました。

計算通り、すべてのゲームにおいて、中盤以降に大量得点を奪い、ゲームをものにしてきました。

畳み掛ける攻撃ができたのも、一度崩れると修正が効かない外国チームの特徴と、それに反して、中一7名、中二7名の学年の違う選手達が良くまとまつた泉佐野リーグのチームワークの良さがあったものです。

それから、もう一つ今回勝ちきれた最大のポイントは、4試合で4失点の投手力の差です。日本の投手のコントロール、安定感は、抜群でコントロールよく打ち取り、守りきる。点をやらない野球こそが、世界No.1の日本の野球と考えます。

最後になりましたが、このような大会を運営される、世界におけるリトルリーグの組織の大きさを改めて感じることができ、また、泉佐野リーグの大会参加にあたり、関係者の皆様には大変なご尽力をいただきましたことに感謝いたします。

2013. 8. 11

泉佐野リトルリーグ インターミディエット監督
兼 リトル・シニアリーグコーチ 北谷 敏寿